

北九州市立
文学館

友の会会報

第11号

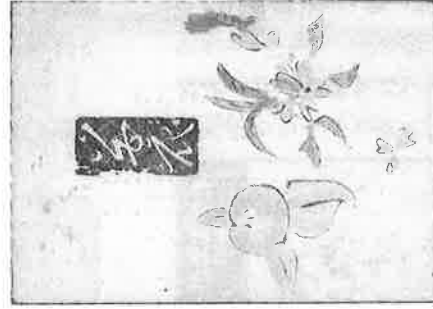
令和2年8月

デジタル展示システム導入 資料全ページ閲覧可能に

文学館リニューアルオープン

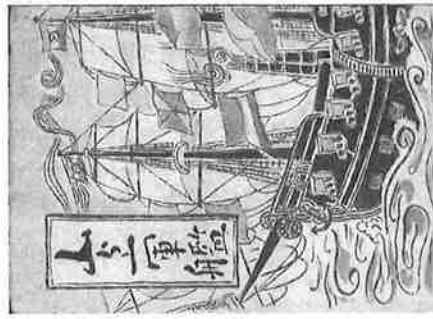
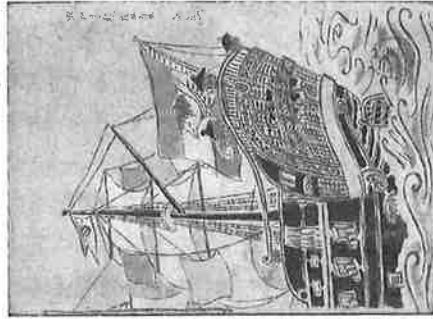
新型コロナウイルス禍で延期されていた市立文学館のリニューアルオープンが実現しました。北九州ゆかりの著名な文豪6人——森鷗外、杉田久女、橋本多佳子、林芙美子、火野葦平、宗左近——を大型パネルで顕彰するコーナーをメインに、北九州の文芸活動の歩みや平成以降の地元出身作家を紹介する場を設けて、より親しみやすい内容になりました。

ここでは国内の文学館でも数少ないという「デジタル展示システム」を紹介いたします。普段は展示ケース内で一部しか目にする事ができない資料全ページを、デジタルシステムを使ってタブレット端末で読むことができます。公開されている資料は前述の6人にちなむ日記や書簡、直筆原稿などをはじめ計22点。数十ページから百数十ページに渡るものも多く、読み通すにはなかなか骨が折れます。



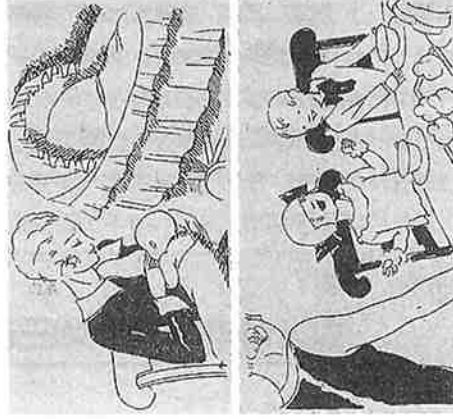
そこで眺めるだけでも楽しめるものを探してみました。まず小倉ゆかりの俳人杉田久女が主宰した女性向け俳誌「花衣」(1932年、全5号)。久女は画才にも長けており、自ら筆を取り四季の花々や果物を毎号の表紙や裏表紙に描きました。創刊号の表紙は桜と橘①。「花衣」は和紙を用いた特装版と洋紙を用いた普及版の2種類があり、創刊号の特装版の表紙は1冊ずつの手書きだそうで、久女の雑誌にかける情熱がしのべれます。

次は作家、火野葦平が1937年、日中戦争出征の直前に出版した詩集「山上



軍艦」。表紙と裏表紙に連なる絵②は友人の洋画家、青柳喜兵衛の作で、葦平も表紙見返しに「河童進軍図」を描いています。「山上軍艦」の題は葦平の故郷の若松・高塔山が軍艦に似ていることから名付けられたもので、葦平はその1冊を背囊に詰めて出征しますが、まもなく小説「糞尿譚」で芥川賞を受賞。陸軍報道部にスカウトされ国民的作家への道を進むことになります。

最後は門司出身の作家、林芙美子の「1932年パリ日記」。芙美子はベストセラー「放浪記」の印税で31年11月からおよそ半年、パリに遊びました。日記はパリのデパート、ボン・マルシエ特製の



〈令和2年度総会報告〉
令和2年度総会は、書面にて開催し、議案6件について、全会員に語った結果、すべての議案で賛同を得られ、可決したことを報告いたします。
令和2年6月16日
会長 後藤みな子

育児日記帳。ページの余白に描かれたあどけない幼児や、若い母親の挿絵が目を楽ませてくれます③。挿絵は広告で芙美子は「夏ならば、海水着を着た女が、砂に寝転んでいる図や、旅を賞美した詩などが書いてある。・・・とても美しい。その絵も同一人の手になってるので、この広告はそう苦にならないのだ」と後につづっています。

(伊藤和人)

映画と文学

「ウイズ・コロナと映画館

「北九州市立文学館」リニューアルオープンおめでとうございます。13年ぶりの改修をわくわくしながら待っていました。

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、文学館のオープンも延びましたが、早春より世界は未曾有の事態に襲われ戸惑いの中にあります。その中で文学館をはじめ公共の施設が対策をとりながら再開されたことは明るい希望です。昭和館も一か月半に及ぶ（昭和14年開館以来初めての）長い休館を経て再開致しました。ご入場の際にはマスク着用、検温、手指の消毒をお願いし、幕間の時間に毎回座席などの消毒を行わせて頂いております。空気消臭除菌装置なども新たに設置して、安全対策に努め皆様に安心してお越し頂きたいと願っております。座席数はソーシャルディスタンスに鑑み、前後左右を空席としております。皆様にご理解ご協力をお願いしながら、「映画の街・北九州」にある映画館として映画の灯は灯し続けてまいります。

そのような今の状況の中で文学館の展示リニューアルを拝見し、あらためてこの街の文学と映画の繋がりを再確認することが出来、意を強く致しました。『無法松の

一生』などの往年の名作35ミリフィルムでの上映は勿論、平野啓一郎『マチネの終わりに』など「今」の作品の上映も控えております。「読んでから観るか」「観てから読むか」さて皆様はどちらになさいますか。
(小倉昭和館館主 樋口智巳)



対策が取られた座席

おすすめの本

『ベスト』

アルベール・カミュ著
宮崎領雄／訳 新潮文庫

新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、『ベスト』は多くの人に読まれているという。一九四×年のアルジェリア・オラン市を舞台にした人間と疫病との戦いが、私たちの現在に、様々な点で重なり合うからだろう。

私がこの小説と出会ったのは中学生のときで、強い衝撃を受けたのを覚えている。今回、改めて読み直してみると、やはりコロナ禍の恐怖と不安、不快な閉塞感等が重なって、その予言的なリアリティーが身に迫ってくる。

「わが市民諸君は大いに仕事をするが、しかし、それは常に金持ちになるためである。」と物語のはじめに語られる。カミュは透徹した視線で、現代へと直結する人間と社会の変化をこの町に見ている。果たして私たちは、どうであろうか。裕福になることは十分に目が向き、文化よりも物質的な繁栄を追い求めてはいないだろうか。

『ベスト』では、感染が「想定外」の速度で広がるなか、戦々恐々とする人々が、ふいに不安の裏返しにも思える奇妙な樂觀を抱いたり、あるいは混乱のはてに諦念にも似た無力感に囚われたりするさまが描かれている。その悲惨な状況に、私たちはコロナに席卷される日本、そして世界の現状を、ひいては活動を大幅に制限されている私たち自身の心の内をまざまざと読み取るのである。

この小説は、こう結ばれる。「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもなく、数十年の間……しんぼう強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろう……。」記憶し続けることの大切さが、強い警告となつて、あたかも作者

カミュ自身の言葉のように、読者に投げかけられている。私たちは、コロナ危機を乗り越えたとき、いったい何を学んでいるであろうか。以前の経済偏重の生活に戻るだけならば、その代償はあまりに大きい。この作品はそうした思考や対話のきっかけを与えてくれるに違いない。

(江口恵子)



新潮文庫 1969.11

レビュー エッセイ

櫛山荘子ども俳句大会

福本 弘明

今年は、新型コロナウイルスの世界的流行により、3月以降に予定されていたイベントがことごとく中止や延期になった。私に関わりがあるのは俳句大会くらいであるが、句会のような小さな集まりでさえ開催できなくなり、お蔭で休日はほとんど巣籠り状態となった。少なくともこの30年間、平日は勤務、休日は俳句と、昼間はほとんど家にいなかったせいか、巣籠りは新鮮で快適であった。休日をこれほど心穏やかに過ごせるならば、退職後の残りの人生はこうありたいものだとも真剣に考えたくらいだ。

そんな後ろ向きともいえる私的幸福感に包まれ、世の中がまた閉塞状態にある6月1日、区役所のランチホールで窓を開け放ち、出席者はソーシャルディスタンスの距離を保つて「櫛山荘子ども俳句大会」の実行委員会が開催された。「えっ、集まるの?」と多少驚きつつの出席である。「櫛山荘子ども俳句大会」は、今年16回目の開催となる。市内と近郊の小中学校に参加を呼びかけ、

9月初旬まで俳句を募集する。昨年は、3500人の児童生徒から投句があった。例年だと、修学旅行や運動会、夏休みの思い出が主な俳句の題材である。指導する先生方も、修学旅行の記録として、あるいは夏休みの宿題として俳句を活用されてきたようである。ところが、今年はコロナショック。修学旅行も運動会もなし。夏休みは極端に短縮される。果たして、子ども達に俳句をつくる余裕があるだろうか、という危惧が実行委員会を開催させたと言ってもいい。

「櫛山荘」は、大正9年に小倉の中井浜に建てられた洋館である。今はない。跡地は「櫛山荘公園」として市が管理している。杉田久女、橋本多佳子ゆかりの地であることから、俳壇史に輝く女流俳人二人を顕彰する意味を込めて、子ども俳句大会の冠とした。大正9年は、1920年であるから、ちょうど100年前。多佳子が小倉に移り住んだ年でもある。久女はこの年、30歳。腎臓病を患って離婚の危機にあり、俳句どころではなかった。折しもスペイン風邪の流行が日本にも及び、人口5600万人に対し45万人の方が亡くなったと言われている。久女にとっては、多事多難の年であったろう。

100年後の今年、同じようにウイルス禍の中にあつて、子ども達はやつと登校の目途が立ち、給食も始まる



櫛山荘外観

と聞いた。学力の遅れを心配する向きもあるが、1年や2年勉強しなくても、その気になればいつでも取り戻せるのではないかと、心配する大人をむしろ心配してしまう。俳句どころではないかもしれないと考えるのも大人の杞憂ではないかと、実は思っている。学校が始まれば、子ども達は長期にわたる異籠りや学校行事の中止に対する鬱憤をエネルギーにして、向にでも挑戦してくれるのではないだろうか。「櫛山荘子ども俳句大会」への投句は、現場の先生方の采配が大きい。「櫛山荘」の建築、多佳子の小倉移住から百年、久女生誕130年の今年、ぜひ、子ども達の可能性を信じて積極的に応募していただきたいと願っている。

会員投稿

「向田邦子展」を

俳誌「青嶺」同人 中嶋 重利

「好きな作家は？」と聞かれれば答えは決まっている。「向田邦子」である。

愛情表現が苦手な父親の娘への慈しみが記された随筆「父の詫び状」を読んで以来、向田随筆の虜になってしまった。

上京の折には、向田がシナリオを書いていた有楽町の喫茶店に行くことにしている。向田の指定席があり、空いていれば座ることができる。その席の左の壁に向田の写真が貼られている。お店の配慮がうれしい。

ある時、私が向田のファンと思つたのが、マスターらしき方が、向田がその店に触れた記事の写しをさりげなく渡してくれた。私のような「追っかけ」が、ちよくちよく来ているようである。

5年前であつた。多磨霊園まで墓参りに行った。2月であつた。お墓には、少し寒さに傷んではいたが、お花が供えられていた。お墓の横には、森繁久彌の向田への

想いのこもった「花ひらき はな香る 花ごぼれ なほ薫る」という句が刻まれた碑が建っていた。亡くなつても、向田は作品を通して、「薫っている。」と思う。

8年前の秋だつた。友人3人と鹿児島を旅行した折、「向田邦子展」が開催されている「かごしま近代文学館」に足を運んだ。展示を見ていると携帯電話が鳴った。先に館を出た友人からであつた。

「すごい発見をした。早く出て来い。」

友人の手には、「向田邦子展」の冊子。その冒頭に友人の知人と向田の関係が書かれていた。その知人は、向田をシナリオの世界に導いた方であつた。宇佐市に在任とのことだつたので、その友人に仲介してもらい、訪ねた。

向田の若い頃の話やシナリオの勉強会に講師として松本清張に来てもらったことなどを懐かしく話してくれた。

私が「写真を見ると、向田邦子は美人だつたと思います。」と言うと、その方は「どかか、美人かね。若い頃は、よくスキーに行つていてね、色が黒くてね。…」と言いながらも、しばらくして、「美人じゃなかったが、美女であつたのは確かだ。」とぼつり。その方は、平成24年9月に亡くなり、もう、向田のことをうかがうことができなくなつてしまった。

食通の向田が地方から取り寄せたお気に入りの一つに小倉「万玉」の「鶯宿梅」がある。向田の随筆「思いもうけて…」に、本当にうまそうに書かれている。現在、「鶯宿梅」は、北九州市ふるさと納税の返礼品に選定されている。「向田が生きていれば、北九州市にふるさと納税をしてくれるかもしれない」と元ふるさと納税に関わつていた職員として、残念に思っている。

向田と北九州の関わりについては、これぐらいしか思いつかないが、いつか、リニューアルされた文学館で「向田邦子展」が開催されることを期待している。

